

化学療法を受けている子どもの食行動

2階東病棟

○町田 和嘉子 谷本 未来 山崎 麻朱 大坪 佳代
武市 光世 坂本 美和

【研究目的と方法】A病院では、化学療法を受けている子どもの嗜好に応じた効果的な栄養摂取への方策を見出せていないのが現状である。本研究は、子どもが感染予防食に対してどのような思いを持ち対処行動を取っているのか明らかにすることを目的とした。看護部倫理委員会の承認後、研究内容と結果の公表について説明、同意を得た13～17歳の子ども6名を対象に半構成インタビューガイドを用いた面接調査を行った。

【結果】子どもは感染予防食について『好きなものが食べられない』『仕方がないこと』と受け止めていた。全ての子どもが、治療に伴い嘔気や嘔吐、味覚変化を体験し、嗜好が変化していた。その中で、持ち込み食はないと生きていけないものとなっていた。子どもは、消化器症状が強い時には『無理に食べない』ようにし、食思や嗜好、全身状態を考慮しながら、家族や看護師に食べられる物や食べたいものを伝えることで、作ってもら、買ってもら、自分で買ってくる、調味料を足す等の『持ち込み食に頼る』という対処行動を取り、外泊時に手作りのものを食べる等の食事への楽しみを見出していた。その一方で、家族や医療者に任せて『準備されたものを食べる』事も多かった。要望としては、制限食のメニューの改善や家族が作れる調理場の提供、楽しい雰囲気ですることができる食事環境の調整が挙げられた。

【考察】子どもは感染予防食について医療者からの説明を理解することで受け入れ、治療が進む中での体験や家族・医療者の関わりによって自分なりの対処行動を見出し、主体的に食行動に取り組むことができるようになっていったと考える。主に対処行動が『持ち込み食に頼る』となっている現状にあり、子どもの成長発達を考えるとより栄養バランスを考えた食事を提供する必要がある。今後は他職種と連携・協働し、家族と一緒に子どもが安心しておいしく食べられる環境作りを行うことが課題となる。

[平成23年11月25～27日 第9回小児がん看護学会（群馬）にて発表]